

興行吾亦行 興止吾亦止

興中道上語不輟 歷指某山與某水
有時俯理襪結解 母呼兒前兒曰唯
山陽一路十往還 省鄉每計瞬息裡
二毛侍興敢言勞 山驛水亭皆鄉里
於兒熟路母生路 雙眸常嚮母所視

侍興の歌（頼山陽）

興行けば 吾も亦行き

興止まれば 吾も亦止まる

興中と道上と 語つて輟まず

歴指す 某山と 某水と

時有つて俯して 理む襪結の解くるを

母兒を呼んで 前ましむれば 兒曰く唯と

山陽の 一路 十たび 往還

郷に 省するに 毎に 計る 瞬息の 裡

二毛にして 興に 侍するも

敢えて 勞を 言わんや

山駅 水亭 皆 郷里

児に 於いては 熟路 なるも 母には 生路

双眸 常に 嚮う 母の 視る 所

解説 故郷の広島から、母を京都に送り、その道中、母の興の側に侍して作ったもの。

語釈 ※侍興Ⅱ駕籠のそばに仕える。

※興Ⅱ駕籠。※道上Ⅱ路上。※輟Ⅱ

やめる。※歴指Ⅱ指さす。※某Ⅱ地

名や場所。*俯理Ⅱかがんで整える。

※襪Ⅱ草鞋の紐。※唯Ⅱ「はい」と

答える返事。※山陽Ⅱ山陽道の略。

※往還Ⅱ往来。※省郷Ⅱ帰省に同じ。

※瞬息Ⅱ一度のまたたき。※二毛Ⅱ

白髪まじり。※山駅Ⅱ山の宿駅。

※水亭Ⅱ水辺に構えた亭。※熟路Ⅱ

歩き慣れた道。※生路Ⅱ初めて通る

道。熟路の対。※双眸Ⅱ両眼。双眼。

通釈 母との旅は楽しい。母の駕籠が進めば、私も歩を進め、駕籠が停まれば私も止まる。母と自分との一体の旅である。風景を見ながら、話とはとぎれない。あれがなにに山、あれがなにに川と、細かく母に教える。思わず話に身が入り、草鞋の紐の緩むのにも気がつかない。それに気がつき、道に屈んで締め直していると、母は私に声をかけ、前にすすませる。私は「はい」と返事をして、駕籠の側にかけて寄る。この山陽道を、私は何度となく往復したが、帰省の時は急ぎ旅、それはいつも同じと感じていた。しかし、白髪まじりの中老になつて、駕籠に従つて歩く。だが、これは厭ではない。山の宿場、川の東屋など、皆、なじみ深く、故郷と変わりがない事を感じている。自分には通い慣れた道である。だが、母にとつては初めての道である。すべてがめずらしく、新鮮に思われることだろう。そこで私も、母の見る所に向けて歩いて行くのだ。